

かずさの博物誌

ニホンアカガエル

～減少が著しい～

文・写真／成田篤彦

2017.3.20



©成田篤彦

▲水を張った谷津田
=2009年3月21日 木更津市

二月の田植え前の水田、タネツケバナが葉を広げています。前夜の雨で、ところどころに水たまりができていて、アカガエルの卵塊が数個ありました。卵塊を手のひらにのせると、コロコロとして、寒天質が指の間から漏れることはありませんでした。さて、上総にはニホンアカガエルとヤマアカガエルとタゴガエルの三種のアカガエルがいます。タゴガエルは丘陵地の崖地などの地下水の中に卵塊を産みます。また、ヤマアカガエルの卵塊は手にのせると指の間から、たれ落ちます。この卵塊はニホンアカガエルのものには間違いありません。三月に入ると、農家の方は田を耕し、水を張ります。雨が降るとニホンアカガエルが冬眠からさめ、水田に集まってきて、生き生きと動き回ります。カエルたちの腹は鮮やかな赤茶色をしています。そして、オスはメスが来るとしつかりと抱き着き、決して放しません。そして、メスに産卵を促し、卵



©成田篤彦

▲ニホンアカガエルのオス（上）とメス（下）
=2006年3月24日 木更津市

を受精させます。時には、間違えてウシガエル（食用ガエル）に抱き着くこともあります。かつて、若いウシガエルが四日間、オスに強く抱き着かれ、そのまま死んでいるのを見かけました。数年前、房総台地の谷津田にこのカエルの卵塊が約五百個ありました。約千匹のカエルがやってきたはずです。そのとき、数羽のトビが珍しく水田の上空を舞っていました。行ってみるとハクビシンとタヌキが水を張った水田の泥に足を取られて息絶えていました。また、イタチの足跡も畦にたくさんついていました。産卵にくるカエルをねらって、これらの動物がやってきたのに違いありません。早春の夜、水を張った水田は動物たちの食う食われるのドラマが展開されていたのでしょうか。その後、ニホンアカガエルの卵塊は水を吸い次第に大きくなっていきます。その中で卵が成長し、ふ化したオタマジャクシになります。春の水田は彼らのオタマジャクシ



©成田篤彦

▲ニホンアカガエルの卵塊=2006年4月9日 木更津市



©成田篤彦

▲ニホンアカガエルのオタマジャクシ
=2006年4月9日 木更津市

memo

ニホンアカガエル
アカガエル科

日本固有種。平地に多い。
参考文献
千葉県11千葉県保護上重要な野生生物。



©成田篤彦

▲ニホンアカガエル
=2010年10月24日 市原市

であふれんばかりになります。初夏には変態し、可愛らしい子カエルが陸上へ上がっていきます。秋になると水田のそばの藪の中でお腹の大きいニホンアカガエルをみかけるようになります。そして、彼らは産卵場所に近い土の中で越冬します。今は食べませんが、昔は、アカガエルが美味しいので、よく食べたという話を聞いたものですが、近頃はイノシシが多く谷津田で蛙や水田を掘り起し、冬眠中のニホンアカガエルを食べているのでは？と心配しています。このカエルは上総では最もよく見られるカエルの一種ですが、県北部では都市化によって著しく減少しています。そのため、千葉県は最重要保護生物に指定しています。



©成田篤彦

◀変体したニホンアカガエル
=2006年5月21日 木更津市